書評

土佐昌樹・青柳寛編
『越境するポピュラー文化と<想像のアジア>』めこん、2005

大久保豊

1．はじめに

本書は、編者の土佐昌樹氏と青柳寛氏をはじめとした、7人の執筆者の論文で構成された論文集である。表題からも明らかなように、本書ではアジア地域のポピュラー文化に関する様々な動向を取り扱っている。土佐氏と青柳氏は、本書の特徴を、「どこか一点に収斂する運動というよりは、予測困難な軌跡を残しながら拡散していく複数の運動である」（229ページ）と述べているが、目次を一読すると、その言葉の意味を容易に理解することができる。本書で扱っている主題は、香港の映画産業から、韓国のテレビドラマブーム、さらには「ガングロ」「ヤマンバ」などと呼ばれる日本の流行文化までもその射程に収めている。本書は、さまざまなポピュラー文化の現象について考察しつつ、それらの論文を統合する形で、「アジア」という枠組みについて再検討を加えることを主要な目的に設定している。本稿では、本書の構成とその内容の紹介を踏まえて、その成果と課題を明らかにしていきたい。

2．本書の内容

本書は序章に続いて、大きく2つのパートに分かれている。

まず、日本のポピュラー文化の動向に焦点を当てた第Ⅰ部、そして、日本以外のアジア地域のポピュラー文化を題材とした第Ⅱ部である。

序章「ポピュラー文化が紡ぎ出す〈想像のアジア〉」では、ポピュラー文化に関するこれまでの文化研究の蓄積について概観した上で、本書の目的とその意義、さらに各章の概要について解説している。

前半のパート「第Ⅰ部 日本から」は、第1章から第3章の3つの章で構成されている 。

第1章「ソフトに売り、ハードに稼ぐ」は、グローバリズムの構造に関するアパデュライの「スケープ（風景）」理論を用いて、筆者のブライアン・モラン氏が「J カルト」と名付けた、アジア地域における日本のポピュラー文化に対する愛好現象について考察している。スケープ理論とは、グローバリズムの重層的な構造を、人々の移動、技術、金融、メディア、思想の各次元（風景）の相互関係の中から捉えようとするものである。これらの中でも特に、メディアの配信するイメージと、人々が思い描く「想像力」の影響を重視している点が、この理論の大きな特色である。本章は読者に対して、本書の各論考に共通した理論的枠組みである、スケープ理論を提示することで、本書全体の理論的指標の役割を果たしている。

第2章「ギャル文化と人種の越境」は、主に「コギャル」「ガングロ」「ヤマンバ」と呼ばれる、近年の日本における、十代少女達の近年の流行ファッションを扱っている。筆者のキンセラ氏は、これらのファッションの形成過程を辿ると共に、日本の少女文化と米国の黒人ポピュラー文化との共通性を指摘している。

第3章「琉ポップの越境性と現代の若者たち」は、筆者の青柳氏が「琉ポップ」と名付けた、沖縄に関するポップ音楽やトレンディドラマそして映画を題材としている。そして「琉ポップ」に接した沖縄の若者たちが、「沖縄」というアイデンティティに目覚め、そのローカリズムを再編成してゆく過程を追っている。

後半のパート「第Ⅱ部 アジアへ」は、第4章から第7章の3章で構成されており、考察の対象を、日本からアジア諸国のポピュラー文化へと移している。

第4章「映画が国境を超えるとき」は、中国・インドなど、アジア地域で流通する映画の越境的側面に着目し、越境をもたらした要因として文化的・思想的側面、非言語性、メディア・ミックス、経済性の3つの観点から検討している。

第5章「台湾のスポーツにみる文化の交錯」は、日本から台湾へと野球が

普及していく中で、外来のスポーツ文化が、台湾のローカル・アイデンティティの形成にどのように影響を与えたのかを明らかにしようとする。

第6章「イデオロギーと脱イデオロギーの狭間から」は、韓国における日本のポピュラー文化の受容について考察している。日本から韓国に波及したポピュラー文化は、漫画、アニメ、映画など多岐にわたるが、本章では、特にアニメを考察の中心に据えている。そして韓国の青少年が、日本のアニメ鑑賞を通じて、彼らの日本のポピュラー文化に対する見方をどのように変化させていったのかを検討している。

第7章「「韓流」はアジアの地平に向かって流れる」は、第6章に引き続いて韓国のポピュラー文化を題材としている。ここでは、韓国のテレビドラマが韓国国外で人気を博している状況（日本の「韓流」ブームはその代表例の一つだろう）について、日本とミャンマーの事例を比較分析している。

3．本書の意義と問題点

以上に示した本書の内容に基づいて、「テーマ」と「地域」の2つの観点から検討し、本書の成果と問題点について明らかにしたい。

まず、本書のテーマについて検討する。本書が現代のポピュラー文化の動向に関する豊富な題材を提示している点を高く評価する一方で、「ポピュラー文化」の概念についての検討が十分とは言えない点を、問題として指摘したい。

本書はまず、ポピュラー文化を、市場で消費されることを前提とした消費文化と捉え、その越境の状況を、文化産業により製造され、国境を越えて流通する過程と捉えている。本書で扱った研究の背景には、近年進行するグローバル化の動きが多かれ少なかれ関与している。グローバル化は国際市場の形成や資本の大規模な流動など、経済分野と密接な関連性を持った現象である。そして文化の次元におけるグローバル化は、独立した動きというよりも、こうした経済的な動向と強い相関関係を持って展開している現象であると言える。その点で、ポピュラー文化と経済の関連性を明確にした本書の定義は評価できる。

また各章ごとに扱っている題材は様々であるが、中には、相互に強い関連性を持った研究もある。例えば第2章と第6章からは、日本と韓国の若者の、「衣装」を介した新たなアイデンティティの構築という、共通したテーマを見出すことが出来る。この二つの考察を踏まえて、若者たちがポピュラー文化の要素をどのように身に纏い、自己表現するのか、そして、彼らの外見や行動が他の人々からどの様な反応を引き出すのか、さらに他者からの反応が、彼ら自身の内面にどのような影響を及ぼすのか、といった新たな考察の視点を導くことも可能だろう。また、第6章と第7章からは、韓国のポピュラー文化が外部文化の流入によって変容していく過程と、それとは逆に、韓国から国外へと展開する過程の、二つの側面を見出すことが出来る。このように、本書が、ポピュラー文化研究の今後の展開を促す様々な切り口を提示している点を高く評価したい。

一方で、本書では、「文化的臭い」（39ページ）や、「超文化化」（182ページ）、「脱国籍化」（186ページ）などの用語を用いて、越境したポピュラー文化の無国籍性を随所で強調している。しかし、メディアを通じて国境を超えた文化が、果たして即座に発祥地との歴史的・文化的な文脈から離脱して、「無臭」の文化となるのだろうか。例えば第6章では、日本のアニメを通じて「偏見や先入観から離れて率直に日本文化に触れている」（183ページ）韓国の若者達、あるいは、第2章で取り上げられた、「ガングロ・ヤマンバ」ファッションを楽しむ少女達の姿を見ると、確かに彼らの行動は、表面的には既存の文化的な枠組みを乗り越えているかのような印象を受ける。しかし、ポピュラー文化の送信者側のコード（価値観）に対して、その受け取り手側は、常にこうした肯定的な評価を下すのだろうか。韓国の若者の中には、日本のアニメを楽しむ一方で、スポーツイベントや、インターネット上で、日本に対する激しい敵対感情を表明する者もいる。同様に、日本の若者がすべて、「ガングロ・ヤマンバ」ファッションに好意的である訳ではない。一連の考察では、こうした人々の視点がいささか見えにくいため、評者はポピュラー文化の「無国籍性」という観念が、果たしてどの程度社会の中で認知されているのか、という疑問を抱いてしまった。韓国における日本のアニメブームや、「ガングロ」「ヤマンバ」ブームの文化的な全体像を

把握するためには、コードの肯定的な受け取り手だけではなく、コードに対して異なった解釈をする受け取り手も考察に含めるなど、より包括的な視点から現象を捉える必要があるのではなかろうか。

次に、本書の扱う「地域」の観点から考察してみたい。本書は日本と他のアジア地域とのポピュラー文化を通じた交流の状況を解明することについては一定の成果を上げているものの、より広範囲な地域を含めた、多層的なポピュラー文化の越境状況については十分に解明したとは言い難いものがある。

本書は「現実を多層的に記述し、流動化するアジア文化の将来をとらえる方法として、「トランスローカルな民族誌」を構想する」（16ページ）ことを目的に掲げている。だが、実際に本書のカバーする範囲は、日本を中心とした北東アジア地域内にほぼ限定されている。確かに第4章ではインド映画に関する事例を、第7章ではミャンマーの韓国ドラマブームについて扱ってはいるが、インド以西の地域に関しては、完全に考察の外に置かれている。これは、各章で展開する議論が、基本的に日本から波及したポピュラー文化、あるいは日本に流入したポピュラー文化に考察の焦点を絞り込んでいるためであろう。結果的に、本書では日本のポピュラー文化と他地域とのトランスナショナルな交流の状況に関しては、様々な角度から光を当てることに成功している。その反面、日本とポピュラー文化の相互交流が活発とは呼べない地域を考察の対象から除外したことで、アジア域内で展開するポピュラー文化の全体像の把握を著しく困難なものとしてしまっている。

4．結論

本書が提示する、ポピュラー文化の越境性に関する多彩な切り口は、同様にポピュラー文化を研究対象に含めたカルチュラル・スタディーズの、「支配体制対民衆」という図式とは異なった視点を提供するものであり、高く評価できる。だが、本書の提示するポピュラー文化の「無国籍性」という解釈の論拠、そして日本以外の地域におけるポピュラー文化の状況については、今後も検証を重ねていく必要があるだろう。

こうした課題は指摘できるものの、本書は現代のポピュラー文化の動態解

明に取り組んだ意欲的な研究の成果であり、今後のポピュラー文化研究に豊富な材料を提供している。

(alabama@urban.ne.jp)